2016年09月13日（火）～14日（水）　全労済・2016年度　労済運動体験学習

2016労済運動体験学習は、神奈川県本部より22人、静岡県本部よりが参加し、賀川記念館・人と防災未来センター、北淡地震記念公園を見学し、それぞれの施設にて講演や体験談を聞き、災害への備えを学習しました。

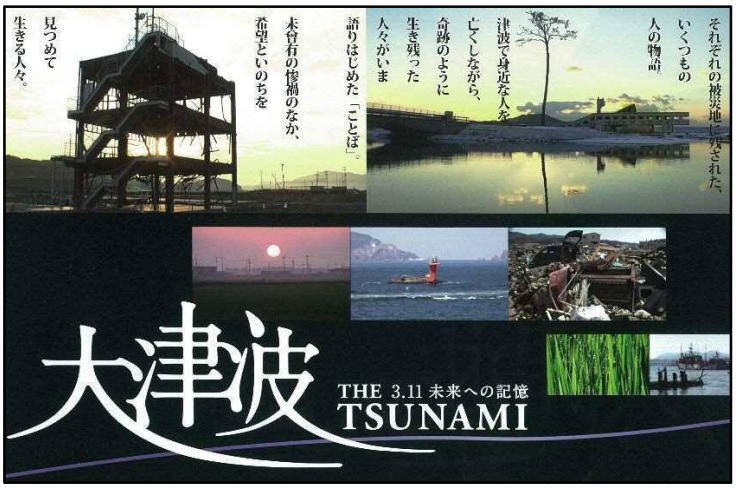
西　氏

賀川記念館では、西参事より、『賀川豊彦』氏の基本思想を学びました。
賀川氏の基本思想は、キリスト教の伝道活動が基礎になっており、共済や労働組合、医療、教育・保育といった様々な事業は賀川氏の活動があってこそ現在があるといわれている。また様々なボランティア活動の源は賀川氏の『理念』であった。貧しい人や弱い人のための仕組み作り、救済の仕組み・防貧の仕組み・助け合う仕組み自立する仕組み・教育の仕組み・社会運動の仕組みを作り、その中で現在も活き続けている。しかし、100年以上前の時代、世界中が混乱し領土紛争から大きな戦争となっている時代に、誰もが、自分が生きるために精一杯な時代に貧しい人のために、まさに生命を投げ打ってでも事業を興すという行動力は、今の政治家にも出来ないことだろう。賀川氏はすばらしい人格者なのでしょう。

賀　川　豊　彦　氏

記念館での講演を聞いて、賀川氏と全労済、賀川氏と労働組合、全労済と労働組合の固い結びつきを感じました。
賀川氏の中心にあるものは『愛』と聞き、ビビッと来ました。特に、講演の中にあった『不易と流行』という言葉に、打ちのめされる感情がありました。不易とは、何事があっても変わることのない『理念』。流行とは、日常変化に対応する。変化を見込んで対応する。しかし、変化に流され大事な理念を忘れてはいけない。賀川氏の残した永遠の財産を、我々は、しっかり受け継いでいるのか？『自分の組織だけ良ければ良い』と思う労働組合の役員は残念ながら多いのではないかと感じました。もう一度、襟をただし、労働者のための労働運動の片隅でもかじる事が出来れば幸いです。

人と防災未来センターでは、大きなスクリーンに映し出された『3.11　東日本大震災』の映像。しかも３Ｄと迫力を感じる映像に鳥肌が立ちました。今なお行方不明の方がおられ、何にも残っていない町、それでも、多くのものを抱えながらも支えあっていればこそ乗り越えられると感じ、不覚にも涙が・・
また、阪神・淡路大震災のシアターもあり、あの有名な高速道路上のバスや横倒しとなった高速道路。地震発生直前からのすさまじい映像、ものすごいフラッシュや音量に恐怖を感じました。



大震災ホールでは、体験を映像で紹介していましたが、あの悲惨な状態から現在に至るまで、建物の復興とともに人間の強さ、地域で暮らす人、被災者との共存、助け愛の大切さを感じました。見学の時間が少なかったのですが、西館2階の防災・減災体験フロア。3階の震災の記録フロア。4階の震災追体験フロア。東館ではシアターや市民ギャラリーなどがある。十分時間をかけて学習したい施設でありました。

【気になったコーナー】

避難所、避難地区などで、一番の問題点は『トイレ』ではないか？

←ダンボールで簡単に組み立てが
出来るトイレ

トイレ内の注意事項→

北淡地震記念公園

翌日、北淡地震記念公園を見学。語りべの小宮山氏、色彩楽園の藤井氏から、体験を踏まえ講演がされました。
小宮山氏は、当時、消防団の一員として、救済活動を行ったそうです。淡路島の南側より北側に被害が大きい。北淡町は3700世帯、11214人。被害状況は、全壊1057棟。半壊1220棟。一部損壊1080棟。300人が生き埋めになったが、昼過ぎには全員を救出。近所の人は、誰がどの部屋に寝ているのかまで知っていたため、家がつぶれても、この辺にいるはずと目安が立ったので、救出することができた。さらに、565人の消防団とＯＢ500人を加えると人口の役1割が消防団として活動できたことも減災出来たのではないか、また、火が出他ところは神戸と違い1件であったこと、いつもなら風が強く吹いているのに、この日は無風であったことも減災に繋がった。日頃から、隣近所のハザードマップを作っておくことも重要な減災のひとつ。避難所生活では、非難して１～２日は、子供たちへ、病気の方にと支い合いが見られたが、３～４日目になると、人間のいやな部分も見る事になる。救援物資は、四国より沢山の物資が入ってきて大変助かった。食べるものがあれば、あちらこちらで炊き出しがされ、神戸で目にするよう

小宮山　氏

救援活動で小宮山氏が実際に歩いた場所

な、何時間並んでおにぎり1個ということは無かったので、混乱は無かったので良かった。地震で家が倒壊すれば、いろいろなものの下敷きになる。時には、声も出せないこともある。そんなときに役に立つのが、ホイッスルだ。寝るときに衣服にはさんだりして身につけていることも大事。声を出すのは体力も使うし、ホイッスルなら、わずかな力で安否が分かる。是非、身近においてほしい。地震は何時起きるか分からないもの、日頃からの備えが重要。室内に、表に水の確保は日頃から出来ること。『命を守る』ことが何よりも大切。また、通電による火災は、絶対に起こしてはいけない。また、大変多くのボランティアの方に助けていただきましたが、全てお任せでは被災した者が甘えきってしまいやってもらうのが当たり前になってしまい。前に進めなくなる。ボランティアの皆さんには、その人にも出来るものは残しておいていただきたい。と述べている。
感）通電による火災はよく耳にする。地震が起きたときにブレーカーが落ちる装備、簡単なものもあるが、ルールを守らなければ、幾らいいものがあっても、第２の災害が起きてしまう。とも感じました。

藤井　氏

色彩楽園の藤井氏は、10年間にわたり『心のケア活動』をしている。被災地に足を運び、子供たちの「こころのケア」をしていると聞き、熊本地震の緊急カンパ活動を呼びかけるチラシを思い出しました。
藤井氏は、神戸には地震はおきないと思っていた。地震が発生して1日目は、情報がない。2日目は、状況が分かってきて、覚悟と夢ではないとガッカリ感を覚えた。3日目には、子供達はどうしているのか？と心配になったことを思いだしました。また、被災地に多くのボランティアが入り、ボランティア元年とされ、同時に心のケア元年と位置づけ子供たちの日常を取り戻す活動をしている。避難所の隅っこや、公園などで子供たちに自由に絵を書いてもらうと、暗い色使いが多い、しかし、子供たちと話をしているだけで、明るい色使いになったり、悪いやつをやっつけるといた絵に変化する。被災した子供たちは、自分たちの居場所がない。自分たちの声を聞いてほしい。と思っているが、子供ながらに我慢している。大人以上に相当なストレスを抱えている。

色彩楽園ホームページから

感）万が一、被災したときに、こういった活動が思い浮かぶであろうか？自分の子供が幼いのであれば、あるいは思い浮かぶだろうが、私には自信がない。しかし、こういった活動自体は大変重要であり、そうなったときにでも思い出し行動できるように心がけをしていきたい。子供たちに声をかけ、話してあげることも重要なことと感じました。子供たちの笑顔が、トゲトゲした気持ちを和らげてくれることを思い出せるようにしたいと感じました。

その後、今でも当時のまま残されている野島断層、メモリアルハウスを見学、莫大なエネルギーの放出を感じた。施設内に阪神・淡路大震災の揺れ、東日本大震災の揺れが疑似体験できる。小学生が、授業の一環で順番に体験させていた。こういった取り組みも必要だと感じました。